

# 中世シク活用形容詞接尾語「らし」の意味特徴

于 艶麗

## 1. はじめに

形容詞は、上代語からその種類にはク活用とシク活用があり、ク活用をする語は情態的な属性概念を表すことが多く、シク活用は情意的な意味を含む傾向があると指摘されている。形容詞の情意性とその形態活用との秩序ある対応関係は、上代語において、非常に特徴ある造語形式である。

中古中世になって、形容詞語構成の特徴として現れるのは、複合と派生によって、合形成容詞が大量に産み出されたことである。その中で、シク活用形容詞接尾語は特に優れた造語能力を発揮し続けていた。本稿では、中世において典型的なシク活用形容詞接尾語「らし」を中心に、その意味特徴と派生語を考察してみたい。

## 2. 接尾語「らし」の辞書記述

接尾語「らし」は『日本国語大辞典』（二〇〇一）には次のように記されている。

形容詞や形容動詞の語幹、名詞などに付いて、形容詞をつくる。近代では「わざとらしい」などのように副詞に付くこともある。いかにも…の様子である、…にふさわしい、…と感じられる、などの意を表す。「あほうらしい」「いとらしい」「男らしい」「にくらしい」など。

\*史記抄〔1477〕一七・游侠列伝「上はなんとない様で内心が毒らしうて人を傷害するぞ」

### 【補注】

「ロドリゲス日本大文典〈土井忠生訳〉」には、「助辞の Mequi, mequ（めき、めく）、Gamaxij（がましい）、又 Yona（様な）によって言ひ換へられる。例へば、Zocuraxij（俗らしい）、Zocuno yona（俗のやうな）、Zocugamaxij（俗がましい）及び Zocumeita（俗めいた）は同じである」とある。なお、ラシイに終わる語としてロドリゲスは「アサカラシイ、ヨカラシイ、ウスカラシイ、ヲトコラシイ、ワラベラシイ」などをあげている。

次に、『時代別国語大辞典 室町時代編』（一九八五～二〇〇〇）の「らし」〔接尾〕の項目には次のような意味記述が見られる。

口語として用いられる。体言・形容動詞語幹などに付き、シク活用の形容詞を作る。終止形「らし」とも。問題とする事物や事態に付けて、いかにもそれにふ

さわしい性質・形態をそなえているさまである意を表す。近世に入って、助動詞「らし」の用法を吸収し助動詞化する。

現代語の「いかにも…のようすである、…にふさわしい」「という気持ちを起こさせる、…と感じられる」などに相当する。

### 3. 接尾語「らし」の出現時期

村上昭子「接尾語ラシイの成立」(一九八一)で、接尾語「らし」の成立について、

①推量の助動詞ラシに由来した。

②異分析の結果、接尾辞ラシイが成立した。

③名詞にラがつき、それに形容詞をつくる接尾辞シイがついたものから成立した。この三つの見通しを検討した結果、接尾語「らし」は、名詞の非反復形を語基とし、それに、情態言の形成に関わるラがつき、さらに、形容詞をつくる接尾辞シイがついた、名詞＝ラ＝シイから成立したと推定している。

上代において存在した接尾語「ら」は、たとえば、形容詞「ものがなし」に接続した副詞「ものがなしらに」に見られる。接尾語「らし」の成立には、このような上代から存在した接尾語「ら」に影響されたように思われる。

\*小金門に物悲良尔思へりし吾が児の刀自を(万七二三)

また、接尾語「らし」の用例は基本的には室町時代に入ってから見られ、唯一鎌倉時代に遡れるのは「愛らし」である。「…と感じられる」という感情的意味は、「いかにも……のようすである」という状態的意味よりも早くに派生したと考えられ、この点から見ても、接尾語「らし」の成立は接尾語「ら」に影響されていることは疑いない。

\*わらはが養ひ姫は、御みめのうつくしくおはして、御目は細々として、あいらしくおはするぞや」(米沢本沙石集 一・一〇)

### 4. 接尾語「らし」の派生語

その上接部分の品詞性によってまとめると、次の通りである。

#### ①名詞+らし

[人を表す名詞]

あほうらしい【阿呆】 おほせらしい【仰】 をとこらし【男】 をなごらし【女】  
しゆつけらし【出家】 ひとらし【人】 わらべらし【童】

[その他の名詞]

あいそうらし【愛】 あくらし【悪】 かいしょうらしい【甲斐性】 しおらしい  
じちらし【実】 しゃうねらし【性根】 じんとうらしい【実頭】 ぞくらし【俗】  
てうはふらし【調法】 どくらし【毒】 なさけらしい【情】 はからし ぶんべ  
つらし【分別】 まことらし【実】 めんぼくらし【面目】

- ②動詞連用形+らし ばけらしい【化】
- ③形容動詞語幹+らし  
 いたいけらし【幼気】 ぎようらし ごたいそうらしい【御大層】 じんじょうらしい【尋常】 すぐらしい【直】
- ④形容詞語幹+らし  
 おさならしい【幼】 かはゆらし むごらしい【惨・酷】 むさらし
- ⑤副詞+ラシ  
 げにもらし【実】 さもとらし
- ⑥その他の語基+ラシ  
 あさからし【浅】 せからしい つべらし

## 5. 接尾語「らし」の意味特徴

上代以降、接辞による派生形容詞が大量に形成された。中古に入って、接尾語「がまし」も現れ、そして終始優れた造語力を発揮した。中世になって、接尾語「らし」が現れ、「がまし」に劣らない造語力を発揮した。その他、「かまし」「がはし」「くまし」「めかし」「らかし」「くるし」「くらし/くらはし」「くろし」など造語力はそれほどでない接尾語も多く用いられ、中古中世において合形成容詞は著しく発展した。

室町時代において、接尾語「らし」は特に優れた造語力を持っている。平安時代に現れた「おとなし(大人)」「まことし(実)」などに類する場合の、「し」に代わって用いられるようになった口語的接尾語として考えてもよいであろう。なお、名詞や形容動詞語幹などの語基は直接「し」を付き、シク活用形容詞になるのは困難であり、疊語形を介してシク活用する場合も、「おおいしい」「めめしい」「げにげにし」のように、基本的に二音節以下のものに限られている。「をとこらし」「をなごらし」「げにもらし」など長音節の語基が多く存在することから見ると、接尾語「らし」によって、疊語形の音節数の制約から解放されることも考えられる。接尾語「し」と疊語形によってシク活用形容詞を形成する場合、前者は語基にある程度情意的意味を要求され、後者には音節数という形態的制限がある。接尾語「らし」は、両者の厳密な要求を緩め、また補う働きがあると考えてもよいであろう。

## 6. おわりに

「がまし」「らし」などの主観的意味を表す接尾語によって、上代語形容詞の「ク活用」と「シク活用」における整然たる語基の情意性に対する要求から解放され、更なる多様な語基がシク活用形容詞の語幹に現れることが可能となった。シク活用形容詞接尾語の発展は中古中世形容詞の造語に豊かな変化をもたらしていた。

中古中世において、シク活用形容詞接尾語が優れた造語力を発揮し、合形成容詞は著しく発展した。情意的意味を表す語基が減少し、その他の多様な語基の発展、合形成容詞の大量出現という事態に伴って、上代におけるク活用形容詞とシク活用形容詞の秩序ある対立関係の緊張は次第に緩んできた。中世以降、合形成容詞がさらに発展し、「がまし」の価値評価のマイナス傾向、「らし」の助動詞化など、形容詞接尾語

の意味特徴に新たな変化が見られた。

【参考文献】

- 『時代別国語大辞典室町時代編』（1985～2000年）三省堂  
『日本国語大辞典』（第二版）（2000～2001年）小学館  
阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店 第六版  
柳田征司（1985）『室町時代の国語』東京堂  
釘貫亨（1996）『古代日本語の形態変化』和泉書院  
川端善明（1997）『活用の研究Ⅱ』清文堂  
斉藤倫明（2004）『語彙論的語構成論』ひつじ研究叢書（言語編）第30巻 ひつじ書房  
村田菜穂子（2005）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院  
村田菜穂子（2002）「古代語形容詞の造語形式—中古散文の形容詞を中心に—」『帝塚山学院大学日本文学研究』（第33号）  
山本俊英（1955）「形容詞活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』23号  
沖森卓也（1985）「形容詞の成立」『日本語学』（4・3）  
松浦照子（1985）「複合形容詞の形成と継承—平安時代散文作品における—」『国語語彙史の研究六』和泉書院  
村上昭子「接尾語ラシイの成立」『国語学』第一二四号 国語学会編 一九八一年  
勝田耕起（1998）「接尾辞ガマシの意味とその変化」『文藝研究』（第145集）  
于艶麗（2012）「室町時代におけるシク活用形容詞に関する考察—合成形容詞の語構成を中心に」『立教大学大学院日本文学論叢』（第12号）  
于艶麗（2019）「上代語シク活用形容詞語幹の性質について」『立教大学日本文学』（121号）  
于艶麗（2020）『日葡辞書』に見る古代語形容詞語構成の変化』『立教大学日本語研究』（第26号）  
于艶麗（2021）「中古中世新出シク活用形容詞の語構成」『立教大学日本語研究』（第27号）  
于艶麗（2022）「中古中世シク活用形容詞接尾語『がまし』の意味特徴」『立教大学日本語研究』（第28号）  
日本国語大辞典 ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）  
日本古典文学全集 ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）